



# 大岡昇平全集

## 第五卷

大岡昇平全集 第五卷

定価 三五〇〇円

昭和四十九年三月一日 印刷

昭和四十九年三月十日 発行

著者 大岡昇平

発行者 高梨 茂

印刷者 山田 博

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二一

電話(五六一)五九二一

〒104 振替東京三四

検印廃止

©一九七四

大岡昇平全集

第五卷

目次

小説 五

花 影

歌と死と空

不十分な動機

誤 判

シェイクスピア ミステリ

狂った自白

エリザベスの謎

399 390 379 368 358 88 3

サツコとヴァンゼツテイ

解題

池田純益

435

416

小説  
五





# 花 影

*ricordi di me, che son la Pia;*

*Siena mi fe', disfecemi Maremma*

*Dante.*

## 一

葉子は最初から男のいうことを、聞いていなかったかも知れない。

「だからさ、露子の足がしびれちゃったんだよ。ひどい熱だった。便所へ行こうとしたら、立てなかったんだ」

松崎が前から自分と別れたがっているのはわかっていた。

子供はいい時に病気になったともいえる。

黙って編棒を動かす手に、松崎の眼がついて離れないのを、葉子は感じている。なにか自分がいろいろを待っているのだ。

しかしいくら葉子が人が好くても、別れ話を出し渋っている男に、きっかけをつくってやるほど、人は好くはない。

「小兒麻痺ってのは、誤診だってわかった」松崎は言葉を継いだ。「いくらおれはいないからって、うちの奴があわ

てて近所の医者を呼んだのが、ばかなのさ。おどかされ損みたいなものだった。東京から小西先生を連れて、おれが帰ってみると、意識が昏迷していた。それが小兒麻痺じゃない証だそうだ、先生は即座に流行性脳炎だっていったよ。そんなら早ければひと月だ」

「そんならいいじゃないの」と葉子がいうと、

「うん、でも半年かかることもあるそうだ」と松崎はいい直した。

葉子はその編みかけのものを、眼の高さに差し上げる。緑と鼠で弁慶に編んだものは、松崎がこの部屋で講義の下調べをする時の膝かけになるはずだった。

東京の二つの大学で西洋美術史を教えている松崎は、週に二度逗子から出て来る。講義日を二日続きになるように選んで、葉子の部屋へ泊っていくのである。

窓に向って両手でささげた編棒から一尺ぐらい垂れ下った

編みかけを、葉子は見ていたわけではない。窓枠に切り取られて、堅く澄んだ秋の空、靈南坂から三河台へかけて、斜面を埋めた屋根と壁が、西日を受けて光っていたのを、憶えているだけである。

おれが来ない日、何もすることがないのはよくない、編物でも習ったらどうだと、松崎は機械編みの道具を買い、講習会の規則書も集めて来てくれた。

材木町の電車通りの美容院の二階にある講習会に、葉子は二、三度通ってみただけれど、女給でもなく、奥さんでもなく、年をとってるんだか、若いんだか見当のつかない葉子の身なりは、同じ会員の若い娘からじろじろ見られる。教えながらできた品物を、銀座の店へ売り込むのがうまいという女の先生から、ある日授業が済んでから、近所の鳥料理に誘われてみると、そこには先生の遠縁に当たるとかいう四十がらみの男がいた。土建会社の課長をしているというその男は、うかがえばアパートへひとりでお住いだそうですが、あのアパートは設計が雑で、用心がよくないんです。仲間の建築屋が扱ったので、よく知っています。あたしがこんど度青山の方へ建てたアパートは壁も厚いし、それぞれの部屋は必ず押入れかお手洗で隔ててありますから、隣へ物音が聞えることは絶対ありませんと、まるで葉子がなんか悪いことでもしているよらない方である。あたしが話すれば権利金なしで入れます。

今のところを引き払って、権利金を返してもらえば、それだけまるまる浮くじゃありませんかと、なんのための親切か、それは男の眼つきで知れるから、そのまま失礼ともいわず立って来た。

そんな親切気を起させる隙があるからだよ、という松崎には、隙のある暮しをさせとくあなたが悪いのよ、と答えた。

無論講習会はそのまま欠席で、せっかく松崎が買った機械は持ち腐れになった。手編みで編みかけたものを、寒さに向って、あなたの膝かけだ、といわないでよかった、と葉子は思った。

「そうさ、病気はそれでいいんだがね。ただ、その熱でわからなくなる前に、娘はうちの奴にいったそうだ、お母さん、いっしょに死のうか」

この言葉の効果を持つように、松崎はまた言葉を切った。「死のうって思うのと、死ぬのとは、ちがうわ」と葉子は答えた。

「そうだろうね。でも、露子は十一なんだぜ。うちの奴が実家へ帰ったり、ごたごたし出したころは、八つだ。母親が死ぬほど——いや、死のうと思うほどに、苦しんでいたのを知っていたんだ。そこまで娘に知られていたのが、うちの奴は辛かったんだな」

「あなたは辛くなかったの」

「おれはなんともない。おれは覚悟している」

「お嬢さんが死んでも？」

「死にやしない。死のうと思っただけじゃないか。自分がびっこになったと思っただ。癒れば死にやしない」

「死にさえしなければ、いいってわけね」

「ただ、ここんとこしばらくは、泊れないだろうと思うんだが……」

と、いつまでも煮え切らない松崎なのである。週に二回じゃいやだ、と葉子は前からいってある。そして講演旅行のついでに、奈良や吉野をこっそり廻ったりするだけでは、いやなのだ。松崎の肌が恋しいというわけではないが、アパートで一人すごす時間の長さに、ずっと前から堪えられない気持ちになっている。

パー・クララへ戻って働くという「それはよし給え」と松崎は止める。

「君はもう若くない。雇われマダムでも、マダムと名がつけばいいが、ただの葉ちゃん、さらし者になることはない。一生僕がついてあげられるから、静かに暮せばいいじゃないか」

「静かに困い者の一生を送れっていうの。あたしなんか、それが相当と思ってるんでしよう」

「だって、君はほんとはパーで働かって柄じゃないんだ」

「どうだかわからないわよ。これでも二十年、銀座の空気吸って生きて来たんだから——働きに出て、浮気されるのが、こわいんでしよう」

「出なくたって、浮気してるんじゃないのか」

「そんなら、別れればいいわ」

「おれは君に就いていたいんだ」

「あたしは就いていて、ほしくないかも知れないわよ」

「そうかなあ。とにかく今まで別れられないで、いっしょにいたんだから……」

「ばかにしないで。帰って頂戴。お金さえもらわなければ、いいんでしよう。なぜ帰らないの。ここはいいたい誰のうち」

「君のうちさ」

「そんなら、今すぐ帰って頂戴。すぐ出て行って」

そんな喧嘩をしながらも、ずるずる三年同じ生活が続いた挙句、娘が死にたいと口走ったというだけの理由で、しばらく来られないと松崎はいうのである。その結果がどうなるか、彼にはわかっていないはずであった。

葉子には自殺未遂の経験があって、死のうと思うことと、死ぬこととはちがうのを知っていた。戦争中、若い葉子が銀座へ出るとすぐ、川崎のある鉄工所主がパーを持たせてくれた。母と祖母と三人暮しの目黒の家にも、離れを建て増した。

葉子のマダムでは心もとなかったので、工場主の差金で母のつが勘定掛として、毎晩店へ出張って来た。同時に葉子の監督も兼ねていたわけで、彼女が客の小説家酒井史朗と親しくするのを、つは好まなかった。

しかし葉子は母があしろといえ、こうしたくなるようになっていたし、工場主というのも、女は葉子一人ではなく、馴染みの芸者もいれば、映画女優もいた。最初はみんな手を切るなんていっていたが、無論それは実行されず、新しく同じ銀座のバーの女給とできて、新宿へおでん屋を出させたという噂を聞いて、葉子の肚はきまった。

来るときまった日には、わざと酒井とよそのバーを飲み歩き、神明あたりの待合へ泊ってしまふ、というよりなことを二、三度繰り返すと、工場主は別れるといい出した。店だけは返せという。母は小説家と切れるという。育ててやった恩を忘れたか、店まで持たせて下さった旦那を大事にしなくちゃいけない。小説家風情と付き合っちゃ、ろくなことにはならないよ、一度つかんだ運を離しちゃだめだ。あたしたちのことも考えてくれなくちゃ困る。旦那にはあたしが謝っておいた、あとはお前がきまった日にうちにいさえずればいいんだよ、とせつつかれても、葉子はどうしてもほかに妾を持った工場主のままになるのがいやだった。

もめて来ると酒井も釣られて熱くなり、初めて目黒の家へ

来て、バーぐらいなら僕だって出します、葉子さんを下さい、と畳に手を突いて頼むのを、母はかさにかかって罵る、そこいら中ごったかえす騒ぎになった。つとはもともと生さぬ仲であるし、酒井にそれほど未練があるわけではない。死んでしまおうとは少女の時から夢だった、眼の前がただもうわずらわしくなった時、ほんとに死ぬ気になった。

祖母と母が三島の菩提寺へ墓参に行った留守、気分が悪いといって店を休み、夜の九時ごろ離れてカルモチンを飲んだ。バーテンの柿崎が運よく酒井の使いで呼び出しに来て、すぐ医者を呼んだので、彼女は三日目に意識を取り戻した。

工場主もこれには驚いて、新聞種にでもなつては大変と、店はほしければくれてやる、とにかくかかり合ひだけは御免だ、ということになった。酒井は報せを受けてから、寢床に付きつきり、バーは母に渡すから、人を雇ってやらすがよい、そのかわり母子の縁は切れたものとする、葉子は身一つで家を出る、というような懸合いまで、みんな酒井がしているうちに、祖母が死んだ。葉子はそれで目黒の家にも未練がなくなり、酒井のいうままに大井町のアパートへ囲われる身になった。

生さぬ仲とはいいながら生れて初めて家族と離れて、アパートの一人住いは淋しかった。酒井は葉子を独り占めにしなくなつたらしい。言を左右して、約束のバーを出す工面をし

ようとしなない。その腹癒せというわけでもないが、取巻きの若い編輯者や文学青年と浮気をした。そのうち戦争は苛酷になり、酒井は従軍作家として徴用されて南方へ行き、葉子は目黒の家へ帰ったが、つがほそぼそ持ち続けていたバーは企業整備で閉鎖、目黒の家も戦災で焼けると、つがはさっさと憲兵中佐の後妻になってしまい、葉子はまた行きどころがなくなつた。

住居だけは中佐の世話で焼け残りのアパートが見つかったところで終戦、酒井は追放になる。郷里の新潟へ引っ込んだまま出て来ず、金も来ないし、葉子との仲は自然解消になつた。憲兵中佐も無論追放で、埼玉の疎開先へ葉子もしばらくいっしょに住んでみたが、追放になつた軍人に、勘定高い母がいつまで附いているわけはなく、そこもまもなく離婚、母は三島の伯父の家へ、葉子は東京へ帰つた。

葉子の行く先は結局銀座よりないわけだが、以前彼女のバーで働いていた女が、第三国人をパトロンにのし上つて、ミンクの外套で風を切つて歩いている終戦直後の銀座では、彼女のような古い型の女は、もうはやらなくなつていた。古い友達が紹介してくれたバー・クララの片隅に、ひっそり坐るのを許される程度だったが、それでも葉子はまだ三十前で若かつたし、古い馴染みもだんだん銀座に帰つて来た。あるいは酒井の友達の文士に、新円がしこたま入るようになった

のが、昔から君が好きだったなんていうのもいて、遊ぶ相手にこと欠かなかつたが、なるほど母のいった通り、一度離れた運は返つて来なかつた。川崎の鉄工場主のようなパトロンにはめぐり合わなかつたのは、歳月を経て、いろんな目についた葉子のいうことすることに、とげが出て来たからであつた。

外国の新しい画風の解説者として、方々の画家の団体の顧問も兼ね、新制大学で西洋美術史を講ずる松崎は、そういう客の中ではましな方であつた。

ふとした風邪をこじらせて肺炎を起し、店をひと月近くも休んでいた時、アパートへしげしげと見舞いに来たのが縁で、なんとなくてできてしまつと、葉子はそのままバー・クララへは出なくなつた。今でこそ苦情をいい立てるけれど、最初はそうしてひっそり暮すのを、むしろよろこんでいたのである。彼女は疲れていた。

葉子の顔立は一応整っていたが、よく見ると造作にちぐはぐなところがあつた。お凸の額は細い鼻と不釣合にせり出しているし、かわいらしい口元を下から支える顎は、利かん気らしく張っていた。ことにちぐはぐな感じを強めるのは、左右の眼の形が違ふことだつた。普段は目に立つほどの違いでもないが、深酔したり人の顔を長く見つめたりする時、片側の脛が下つて来て、眼がちんばになってしまうのである。

こういう欠点をかくしたのは、結局肌の白さである。子供  
の時から、家へ来る大人たちに纏緻よしといわれ、道傍で遊  
んでいると、通りすがりの夫婦づれが「かわいい子ね」と囁  
きながらすぎて行ったりするので、そのころから自分に人を  
惹きつける力があるのを、葉子は知っていた。ただ近所の男  
の子が「白っ子、白っ子」とはやすのは、あんまりほめてい  
るようではなかったから、

「白っ子って、なあに？」と母にきくと、

「誰がそんなことをいうんだい」とてつは眉をひそめた。

「白っ子ってのは、眉毛まで白い子供さ。お前は少し髪が赤  
いだけで、白っ子なんかじゃいやね。東京の子は口が悪い  
よ」

ある日、目黒の不動様の縁日で、「ほら、あれが白っ子さ」と  
指さして教えられたのは、齢は葉子と同じの七つぐらい、  
丈の低い男の子だった。お盆のように円い顔は透き通るよう  
に白く、髪も眉毛も亜麻色で、女の子みたいに袖の長い矢絰  
を着せられていた。母親に手を引かれて、きよるきよるあた  
りを見廻しながら歩いて行った。自分がほかの子供と違って  
いるのを知っている、淋しそうな姿だった。

そんな不具みたいな子でもない葉子が「白っ子」と呼ばれ  
たのは、拾いっ子にかけた、棘のある言葉だと、彼女に教え  
たのは、神田の生れの高島先生だった。

「東京弁じゃ、ひろうは、ひろうになるからな」

高島謙三は昔葉子がパーを持っていたところからの客である。  
最初連れて来たのは、例の工場主で、日本橋の骨董商もいっ  
しよだった。工場主は高島の指導で、流行の李朝の壺を買い  
出していたのである。

高島はそのころは齢も三十を越したばかり、ある金持の蒐  
集家が朝鮮から買って帰った陶器を整理して、図録を出した  
ばかりだった。選択には少し片寄ったところがあるというこ  
とであったが、それが一つの主張で買かれているのは、誰の  
眼にも明らかだった。

商売人は無論そんな頑固な選り方をしなかったから、高島  
が捨てたものでも、それぞれに値がついて、好事家の手から  
手へ渡って行ったが、彼の図録に載った品目は博物館の後光  
を帯びたということである。陶器の肌に人間の肌を空想する  
ような、一種の文学的鑑賞法の流行の兆があった時で、高島  
の仕事は一部の美術評論家の間で、評判になった。

高島はそれからずっと葉子の身辺にあつて、なにかの時に  
相談相手になってやった。葉子が自殺を図った時も、見舞い  
には来なかったが、長文の手紙を寄せて、その不心得をさと  
した。「人間には自殺する値打なんかない」と彼は書いた。  
高島の言葉は、葉子にはわからないことの方が多かったが、  
彼女はわかろうと努めた。高島を知っていることを誇りに思

っていた。

高島は葉子が小説家酒井を知ってから、とかく身邊に濃くなつて来た文学的影響を、取り除こうと努めた。男は文士だけではないのだし、彼らはとかく物事を大袈裟に考えるから、間違ひのもとだというのが、彼の意見だった。

松崎が葉子に会つたころも、高島は葉子の忠実な保護者であつた。松崎が外国の書籍から学んだ理論は、高島が鑑定の実際を通して体得した見識と一致したから、松崎は高島の話に耳を傾けた。ただ高島は戦災によって、以前彼に贅沢な修業を許した財産的基礎を失つていたので、葉子にとって、それほど有益な保護者であるかどうか、を危ぶんだ。

ことに彼は高島が「白っ子」の東京の意味を葉子に教えたのは、余計なことだと思つた。なぜなら彼の考えでは、葉子の不幸は、彼女がてつの実子でないと、知つたことから始まつているからである。

無論葉子が高島から「白っ子」が「拾いっ子」の意味を含んでると聞かされたころは、彼女はもう母との關係を、割り切つて考へていて、それほど傷つたわけではない。第一、彼女は高島のいうことなら、なにをいわれても腹が立たないのである。彼女は笑つて、

「拾いっ子の方がよかつたわ」といつただけであつた。

彼女が最初その事実を知つたのは、十四歳の春、同じ家に

いた一つ年上の従兄と喧嘩した時である。

「おれはお前の従兄でもなんでもない」と、その男の子は切り出したのである。

葉子の父は静岡から三里ばかり山へ入つた小さな村の地主であつた。掛川の商家から来た母は、酒乱の夫の虐待に堪えられず、一男一女を残して出奔してゐた。そこへ後妻に行つたのが、てつである。彼女には子供はなく、二年後にはその家を去つたが、三歳の葉子は彼女になつていて、てつが最後に家を出る時も、離れようとしなかつた。いずれは返すつもりで、一旦三島の実家へ連れて帰ると、こんどは祖母が葉子を離さなくなつた。てつは東京へ出て後援者を見つけ、震災直後で空地が多かつた有楽町で、新聞記者相手の支那料理店を開いた。てつの兄弟はみな死んでいたので、祖母と葉子を、女手一つで養わなければならぬ立場になつてゐた。料理店が成功して、目黒に家を借りるまで、葉子は三島の古い家で、祖母に育てられた。

葉子の最初の記憶は、てつに連れられて、蜜柑畑を上つて行く情景だから、静岡にいた時である。空はよく晴れ、日が高かつたような気がする。蜜柑の木の下をくぐれるくらい小さかつたのである。匂いもあつたかも知れない。先に立つたてつが振り向いて、何かいつている顔だけ憶えている。「しっかりお歩き」と、はげます言葉だつたのだらう。てつの顔

は、姐さんかぶりにした手拭の下に暗く、こわかったと憶えている。

その次は、天井の高い大きな部屋で、夜中にひとり眼ざめていた場面だから、三島の家に違いない。そんなら祖母もいっしょに寝ていたはずなのだが、その記憶は落ち、ただほの暗い光に照らされた天井の映像だけが残っているのである。てつが家にいないのを知って、烈しく泣いたことがあるそのうちである。てつが東京と三島の間を往来し出してからにきまっているが、葉子はそれを憶えていない。祖母の乳首を吸いながら、葉子は眠ったということである。すると六十五の老婆に乳が出たと、奇蹟のように語られた。

てつと血のつながりがないと知ると、十四歳の葉子は、家の中で祖母のほかは、口を利かない子になった。よそ者という意識から、自分の中へ閉じ籠っただけではなく、それまでてつに向けていた愛情が裏切られた理由をそこに見つけて、てつを憎むようになったのだ、と松崎は解釈している。

葉子が自分を虐め、自分を汚すことによるこびを見つけるようになったのも、この憎悪からだ。と松崎は思っている。それまでの葉子の意識では、てつは実の母親となんの変わりはないからである。過去をふり返って、自分の不幸を反芻する習慣を、葉子は養っている。それは四十に近い今日まで続いている。だから「白っ子」が「拾いっ子」の意味だ。

どと教えて、新しく刺戟するのはよくはないと、松崎は考えた。

てつの支那料理店は、界隈に同じような店ができたすと、経営困難に陥り、入手に渡った。一家はしばらく目黒の家で、居喰いになった。葉子は女学校を中途退学して、小学校の友達が勤めている百貨店の食堂の女給になった。それからその友達といっしょに、そのころ銀座にできたドイツ式のピヤホールの女給に応募した。そこからバーまではひとまたぎだった。

若い葉子はある店ではダニエル・ダリユーに、別の店ではディヤナ・ダービンに似ているといわれた。彼女はいつも同じ顔で同じ化粧をしているのに、女優の名前の方が変わったのである。西洋美術史の研究家の松崎は、この現象を次のように説明した。

「日本人の美人の観念が、外国の映画スターをもとに作られた時代だったんだ。日本のスターは外国のスターのプロトタイプによって生産されていた。君の赤い髪と白い皮膚の上に、男のエキゾチックな憧れが、勝手な美人を作り上げたんだ」

こういうさまざまな哲学的観察で、葉子を飾ることができると松崎が、娘が病気になるたというだけの理由で、彼女がうんというはずがないことを、いい出したのである。



「そんなに大変なら、いつでも別れてあげるわよ」と、葉子はいい、手にあった編みものを、ゆっくりほどき出した。

## 二

まもなく松崎勝也はアパートの狭い階段を降りた。部屋ごとに入出口のついた流行の設計で、二階の葉子の部屋から、両側を壁にはさまれた暗い階段を五、六段降りると、出入口の上り框が眼の高さに来る。その小さな棚から靴を降ろし、一尺ばかりのたたきへおいて、はくのである。葉子は窓際に向うをむいたまま、立って来なかった。

ドアを開けると、子供たちの声が、ともに吹きつけて来る。路地の向うはコンクリートの塀で、そこが小学校なのだ。放課後の校庭ではしゃぐ子供の声が、一つになって、空にある。

朝ならば、校舎から出る声が、しめ切った室内まで侵入して来る。それを葉子の部屋で聞くのが、松崎には辛かった。

「少しうるさかないか。どっかへ越そうか」と誘ってみるのだが、葉子は、

「あたし、子供の声、好きよ。にぎやかで、助かることだってあるわ」という。

娘の露子を思い出すからいやなのだ、と松崎はほんとうのことをいえない。妻の郁子と露子の前で葉子のことをいわないように、葉子の前では妻と娘のことをいわない。露子の名前を出したのは、今日が初めてだった。今日だけはどうしてもいわなければならなかった。するとそれはすぐ別れ話と結びついたのである。

学校の塀が十間ばかりで尽きるところで、道路へ出る。それから福吉町の電車道まで、だから坂を降りて行く。家並の低いこのあたりでも、傾いた秋の日に、アスファルトはすっかり影に入っている。歩くにつれ、子供たちの声とともに、葉子のアパートも後になる。

こん度は別れることになるな、と松崎は思った。口では強くないながら、窓へ向いてしまった葉子の肩が、がっくり落ちて見えたのに胸を突かれ、後ろから抱いて、考え直したらどうだいといってみたのだが、葉子は黙って首を振っただけだった。するとほっとした気持になったのに、松崎は自分で驚いた。

三年の間、松崎の苦労は大抵ではなかった。身から出た錆といえばそれまでだが、二軒の家を支えて行く金の苦労だけでも大変である。教師の俸給は問題ではない。辞典の編輯を受け持ったり、美術雑誌に載せる複製を選定したり、新聞へ展覧会評を書いたり、是非必要の金となれば、編輯者に対す